

基調講演

「21世紀の経済学」

宇澤弘文
(東京大学名誉教授)

ただいまご紹介いただきました宇澤です。本日は同志社大学経済学会の50周年というたいへんおめでたい席に招かれましてまことに光栄であります。ただ、「21世紀の経済学」という大きなテーマを掲げましたことに戸惑っております。このテーマにお答えすることはむずかしいかもしれませんが、これからの経済学をどういうふう考えたらいいのかということについて、私なりに考えておりますことをお話して、ご参考にしていただけたら幸いに存じます。21世紀という言葉を思わず使いましたのは、ちょうど20世紀の終わり、世紀末という状況になっていて、とくに今年に入って、暗くどうしても考えが纏まらないような事件が相次いで起こっておりまして、まさに文字通り世紀末の混迷という感じを今更のようにもっているからです。そういったなかで新しい世紀への展望をもつということは非常にむずかしいと思いますが、私なりに役を務めたいと思います。

この世紀末という言葉は、じつは13世紀の末、イタリアの大文学者であり思想家であるダンテが最初に使った言葉です。ダンテは当時、故郷のフィレンツェを追われて、ヨーロッパを放浪して歩いていました。その間に彼は『神曲』の構想を纏めるわけです。この『神曲』はダンテのもっていた政治的、思想的あるいは文化的なすべてを表明した、おそらく人類のもっとも偉大な文学作品のひとつではないかと思

います。ダンテは非常にリベラルな思想をもっていた人で、そのゆえに故国を追われるわけです。そこで、ダンテはリベラリズムの立場から北イタリーを中心とする当時のヨーロッパの政治的、文化的、経済的あるいは軍事的な状況、混乱を憂いて、世紀末という言葉を使って表現したのです。偶然といいますか、そのあと世紀末には例外なく混乱、変動が起きました。とくに深刻だったのは、19世紀の世紀末です。私たちが、普通、世紀末というとき、19世紀末を意味するほどです。じつは、19世紀末の混乱が的確に処理されないまま20世紀に入って、そして、第一次世界大戦をはじめとして、じつに悲惨な世紀をおくることになってしまったわけです。20世紀末も19世紀末に劣らないような悲惨で深刻な状況になっています。

この19世紀の世紀末の状況を的確に表現した歴史的な文章があります。それは、「レールム・ノヴァルム」(*Rerum Novarum*)という、当時のローマ法王レオ XIII世が出されたエンスクリカル (Encyclical Letter) です。エンスクリカルというのは、その時々々のローマ法王がご在位のときにひとつは出されるのが慣例と聞いていますが、そのときどきの世界の重要な問題についてローマ教会の公的な立場、考え方をくわしい文章にして全世界のビショップに配られるものです。いわば、カトリック教会の思想的なひとつのリファレンスをつくらなくてもよいと思います。そういう意味で、カトリックの方では同時通達と訳されています。このエンスクリカルのなかでとくに歴史的な意味をもつものが、1891年5月15日に出されましたレールム・ノヴァルムといわれるエンスクリカルです。レールム・ノヴァルムというのはラテン語で「新しいこと」という意味ですが、カトリックの方は「革命」というふうに使われています。このレオ XIII世が出されたレールム・ノヴァルムには、副題があります。それは、“Abuses of Capitalism and Illusions of Socialism”です。つまり、「資本主義の弊害と社

会主義の幻想」というのが、1891年に出されたエンスクリカルの副題といますか、メインのテーマです。このなかでレオ XIII 世は、とくにイギリスの大都市を中心にして、いわゆる資本主義的な国々の一般大衆が非常に悲惨な生活を強いられている、とくに子供たちの置かれている経済的条件、教育の状況が、まったく地獄にも等しいということの詳細に分析され、これらはすべて資本家階級が非常に貪欲に利潤を追求して、一般の大衆、労働者、あるいは子供たちを徹底的に搾取しているからだということを述べられています。そしてこの資本家階級の罪をきびしく糾弾されるわけです。それが資本主義の弊害です。ところが、多くの人々は社会主義になればこういう問題は解決され、救われると思っている。しかし、それはとんでもないことであるといわれるのです。もし、社会主義になればもっと悲惨な現実がまっている。そこにはひとりひとりの人間的な存在すら否定されかねない状況になる危険性をもっていると説得的に述べられています。それが社会主義の幻想、“Illusions of Socialism”です。これを受けて、たとえばヨーロッパでは、新しいタイプの労働組合運動が起きます。あるいは、協同組合運動がはっきりした思想的な位置づけ、根拠を与えられて、大きな発展を遂げるわけです。しかし、ご存知のようにレオ XIII 世の警告も空しく、1917年のロシア革命にはじまって、つい最近まで70年以上にわたって、ときには世界の人口の3分の1が社会主義の圧政下に生きるという結果になってしまったわけです。

これを受けて1991年、今のローマ法王ヨハネ・パウロ II 世が新しいエンスクリカルを出されることになりました。新しいエンスクリカルをつくる作業をお手伝いするよというお手紙をヨハネ・パウロ II 世からいただきましたのが、1990年の8月です。あとになって知ったことですが、ローマ教会2000年の歴史で、アウトサイダーがエンスクリカルの作成をお手伝いするというのは私が最初だったというように

聞いています。私は前々からこの問題を考えていましたので、さっそくお返事を差し上げて、新しいルールム・ノヴァルムのテーマを“Abuses of Socialism and Illusions of Capitalism”つまり「社会主義の弊害と資本主義の幻想」とされたらいかがでしようかと申し上げたわけです。ローマ法王は非常に喜ばれて、それから半年間、新しいルールム・ノヴァルムの作成のお手伝いをしたわけです。1991年の5月15日にこの新しいルールム・ノヴァルムが出されました。その副題が示すように、社会主義の弊害に対して徹底的な批判をすると同時に、資本主義になってもけっして解決しないという、まさに100年前のルールム・ノヴァルムをひっくり返したものになったわけです。そして新しいルールム・ノヴァルムは、私が前々から考えておりました社会的共通資本の考え方にもとづいた経済学を組み立てる作業がその基調となっております。今日は、そのこととお話して、ご参考にしたいと思っています。

「社会主義の弊害と資本主義の幻想」を提案してヨハネ・パウロⅡ世は喜ばれたわけですが、ヨハネ・パウロⅡ世はじつはポーランドの方です。ずっとポーランドにいらして、ローマ法王に選ばれてはじめて国を出て、ヴァティカン、ローマに行かれたわけです。その間、40年間にわたって、ソ連の過酷な支配下にあつて、宗教だけでなく人間の魂の自立を守るために全力を尽くされた方です。お返事を差し上げて、最初にいただいたお手紙のなかにも、自分の祖国が社会主義の圧政下から自由になって、新しい作業をはじめたということは非常にうれしいと思う。しかし、あまりにも急速に資本主義への道を進みすぎているのではないかと、そういうお言葉がありました。そして、私に、お前、経済学者として聞くけれども、資本主義は信用してもよいのだろうか、“Is capitalism all right?”とフランクに言われたわけです。資本主義とか社会主義とかいう概念を超えてすべての人々の人間的尊

厳が守られて、魂の自立を支え、そしてすべての人々に市民的権利が最大限に確保されるような、そういう経済社会をつくる、そのためにどういう制度を考えたらよいのかというのが、ヨハネ・パウロⅡ世が私たち経済学者に対して投げかけられた非常に重い課題です。

このすべての人々の人間的尊厳を守り、魂の自立を支え、市民的権利を最大限に確保するという言葉、これはリベラリズムの基礎にある言葉そのものです。リベラリズムというのは、さきほど言いましたダンテがおそらく今のような言葉で理解した最初かもしれませんが、普通、リベラリズムというときにはアメリカの独立戦争の原点を意味しています。イギリス植民地の圧政下にあつて、人間的尊厳が冒され、魂の自立が損なわれ、そして、市民の基本的権利が大幅に疎外されている。それに対して立ち上がったのがアメリカ独立戦争だったわけです。この考え方をひとつの思想的、学問的体系に纏めあげたのが、ふたりのシカゴ大学の教授です。ひとりにはジョン・デューイ、普通、教育哲学者として知られていますが、もうひとりにはソースティン・ヴェブレンです。このふたりは偶然ですが、同じ年にイエール大学で博士号を取って、そして、同じ年に新しくできたシカゴ大学に赴任して、デューイは哲学、ヴェブレンは経済学の基礎をつくるわけです。このふたりのもっていたリベラリズムの考え方は今も多分にそうですが、当時にあつては異端でした。シカゴ大学の当局者に受け入れられず、ふたりとも間もなくシカゴ大学を去ることになります。

シカゴ大学はもともとジョン・D・ロックフェラーがつくった大学です。ジョン・D・ロックフェラーは、19世紀末のアメリカの最もノトリアスな資本家のひとりであります。当時アメリカでもっとも悪名高い資本家がふたりいました。ひとりがジョン・D・ロックフェラー、もうひとりにはリーランド・スタンフォードという人です。レオ XIII世があくどい資本家の搾取と言われたときに、このふたりを念頭

においたのではないかと思います。ロックフェラーは産を成し、そして、自分の名前のついた建物をつくりたくてハーヴァード大学に巨額のお金を寄付を申し出ます。ハーヴァード大学はそんな悪名高い資本家のお金は受け取れないということで、イエール大学にもアプローチしましたが、イエールも断ることになりました。そこで、シカゴに自分で大学をつくるわけです。世界で最初の大学院大学です。スタンフォードも同じころに、悪名高い資本家、鉄道王といわれていた人ですが、やはり労働者を搾取しました。外国（主として中国）から連れてきた労働者の給料を支払う前日に、宿舎に爆弾を仕掛けて皆殺しにしまった話が伝わっているほどです。スタンフォードは息子さんがイタリーで若くてして客死して、それを記念してハーヴァード、イエールに寄付しようとして、それも断られて、所有していたパロアルトの広大な牧場にスタンフォード大学をつくるわけです。したがって、スタンフォードは正式にはリーランド・スタンフォード・ジュニア大学といわれています。皮肉なことに、悪名高き資本家のつくった大学ですが、シカゴ大学、スタンフォード大学とともに現在世界でもっとも魅力のある優れた大学になっています。しかし、そのプロセスは必ずしも平坦なものではなかったわけです。デューイはその後、コロンビア大学に移って、アメリカの20世紀の教育学の基礎をつくります。ヴェブレンはスタンフォードにしばらくいましたが、その後恵まれない一生を送ったのですが、経済学の歴史で深遠な経済学者のひとりだと思っています。そのふたりの考え方の基礎にはリベラリズムがあって、リベラリズムの考え方を心にとめながら、それぞれ教育哲学、経済学の分野で輝かしい業績をあげたのです。

デューイとヴェブレンのふたりの立場、考え方は非常に似ていて、これからお話しする社会的共通資本というのも、ある意味ではこのふたりの思想を私なりに整理したものと言ってよいと思います。リベラリ

ズムというときにまず肝要なことがあります。それは、宗教的権威に屈せず、金銭的な誘惑に負けず、政治的な圧力に屈服しないで、すべてから自由な立場にたって考えを進めるということです。私はヨハネ・パウロⅡ世からお手紙をいただくまでは、カトリック教会に対してある種の潜在的観念というか、違和感をもっていました。実際にお手伝いをしてたいへん感動する場面に何度か巡り会うことができました。社会的共通資本の考え方は、もともとはリベラリズムの理念を社会的な制度として考えてきたものですが、ヨハネ・パウロⅡ世のお考えとぴったり一致して、私としてはたいへんな名誉に思うとともに、ヨハネ・パウロⅡ世の、あらゆる権威に屈せず、自らの理念、信条を守り通すというリベラリズムに徹した崇高な生き方と同時に、時代を先取りした聡明さに深い感銘を受けた次第です。この社会的共通資本というのは、結局、人間が人間らしく生きていくために非常に重要な役割をはたす大事な施設、サービス、あるいは環境を、国民の共通の財産として大事に管理、維持していこうというものです。社会的共通資本をうまくつくって維持していくことによって、すべての市民が自由な人間らしい生き方ができて、同時に調和のある、最近の言葉で言いますと持続可能な展開をすることができるようにしようというものです。

大雑把にいきますと3つのカテゴリーがあります。第1は「自然環境」、大気とか河川、水、その他、自然環境、あとで大気について少し詳しくお話したいと思います。第2のカテゴリーは「ソーシャル・インフラストラクチャー」といいますか、道路とか電力、上下水道の施設、その他社会が円滑に機能するために大事なサービスを供給している施設などです。これはみなさんご承知の通りであります。第3は「制度資本」です。学校教育制度、医療制度、あるいは金融制度をはじめとして、社会が円滑に機能して、すべての人々が人間らしい生き

方ができるようにするために大事なサービスを提供している制度、あるいは施設です。これを制度資本と呼んでいます。今日はそのなかで教育について少しお話したいと思います。このような社会的共通資本を大事に管理することによって安定した社会がつくられるわけです。このときに社会的共通資本は、けっして、市場的基準、儲かるから、儲けを求めて学校を経営するとか病院を経営するのではなくて、社会的共通資本として人に一番大事なものを供給していくときに、おのずからひとつの社会的基準にしたがって運営されるものです。その社会的基準はだれがどのようにして決めるのか。たとえば病院についていいますと医療の職業的な専門家の集団が職業的な倫理にしたがい、職業的な技能、知見、専門的能力を十分生かして管理していくという意味で職業的な専門家集団がそれぞれの社会的共通資本のジャンルを管理していくことを意味します。けっして儲かるからやるということではない。また、政府が国の統治機構の一環として管理するのではないことを強調する必要があります。極端にいいますと、社会主義というのは、そういったすべての重要な稀少資源、生産要素を政府、あるいは共産党が管理していくもので、それに対して資本主義は、きわめて単純化した形でとらえますと分権的に、儲けということを経験として判断していくことを意味します。社会的共通資本は、そのどちらでもない。普通その中間的な社会的組織をコモンズと呼んでいます。そして、それはそれぞれの職業の専門分野、専門家が専門家としての判断にもとづいて維持していくのです。

このことは教育の場合にとくに重要な意味をもちます。経済学には、「教育の経済学」というのがあります。教育を受けると所得が増える、人々はできるだけ一生の所得を大きくしようとして、大学に行くか行かないかを決めるというのが、教育の経済学です。最近の経済学のひとつの流れとして、狭い意味の経済学の論理なり考え方を人間活動の

+

すべてに適用しようという考え方があります。もともと新古典派の経済学をつくった中心的な経済学者はワルラスという経済学者です。もう30年ぐらい前になりますが、ワルラスが青年時代、小説家を志していたときに書いた文章の草稿が見つかって、ジャッフェという人がフランス語から英語に訳しました。これはこういう内容です。ある若者が恋をする。結婚するかどうか悩んでいる。そこで結婚したときにどれだけ得をするかというのをいちいちリストアップします。結婚したときにどれだけコストがかかるかをこれも詳しく分析する。そして結局、結婚しないことにしたというのがその草稿の梗概です。ワルラスは、じつはその草稿をみて小説家としての才能がないことを自ら知って経済学者になったと言われています。じつは結婚の経済学というものも最近はやってしまして、結婚するかどうかというのかなりベネフィットとコストで決めていくという考え方です。犯罪の経済学というものもあります。これは人を殺したときの喜びとそれから捕まって死刑になったときの苦しみを確率的に計算しますが、そのベネフィットとコストを比較して、人を殺したときの楽しみが大きければ殺す。そうでないときは殺さないというのが犯罪の経済学です。これを中心になってやったのがゲーリー・ベッカーという人です。彼はその他にもディスクリミネーション(差別)の経済学とか、人間の行動すべてにこのような考え方を適用しようとしています。この考え方は、経済学の現在のあり方を象徴していると思います。脱線しましたが、教育の問題も単に大学に行って儲かるから進学する、儲からないから行かないという考え方は、大学なり教育の問題を市場原理によって解決していくというものです。それに対して、社会主義の下での大学、教育というのは、国家があるプログラムを決めてだれが何を勉強してどこでどういう仕事をしろということを決めていくわけです。それももちろん人間の本性に反するものです。リベラリズムというときには、ひと

+

+

+

りひとりの子供たちがもっている本性的な能力とか、性向、能力をできるだけ生かすというのが教育の目的でなければならないのです。

明治の始めに、エデュケーション (Education) という英語を日本語に訳すさいに、福沢諭吉と森有礼の間で大きな論争がありました。福沢諭吉は教育を「開発」というふうに訳したのです。それは、彼が頭に描いたのはエデュケーションのディベロップメント (Development) の方に重点をおいて、開発と訳したのです。よく写真のフィルムを現像することをディベロップメントといいます。フィルムに入っているものを目に見えるようにする、それがディベロップメントなんですね。子供ひとりひとり、みんな生まれながらに心のなかにすばらしい本来そなわっている、インネイト (Innate) といいます。フィルムと同じように子供によって千差万別、それをできるだけやさしく育てて立派な花を咲かせる、それが教育であると福沢諭吉は考えたのです。そこで開発と訳をあてた。それに対して、森有礼は、国家が国家的理念にしたがって子供を教え育てるのだとあって、「教育」と訳したのです。ご存知のように森有礼は初代伊藤博文内閣の文部大臣として教育勅語の草案を書いた人です。そしてまた、大学から小学校までの日本の学校教育体系をつくった人です。じつは福沢諭吉と森有礼、ふたりはそれまで同志だったのです。ふたりで一緒になって明治6年に明六社という会社をつくります。社長が森有礼で専務が福沢諭吉という会社でした。そして『明六雑誌』という雑誌を出します。これは明治初期のもっともすぐれた啓蒙的雑誌、リベラルな雑誌でありました。たとえば、キリスト教を国教にせよという論文が載ったり、男女同権論が載ったり、その当時、まったく信じられないほどリベラルな立場にたった論文が次から次へと出ました。そこで、明治政府の忌避するところとなり、潰されてしまいます。その後、森有礼は外交官になりますが、たまたま、ロンドン駐在の公使をしているときに、

伊藤博文が新しい内閣をつくるための準備としてヨーロッパを訪問しました。森有礼はベルリンまで伊藤博文を訪ねて、そこでどういう話し合いがされたか知りませんが、彼はそれまでのリベラルな立場を一変して伊藤博文の初代の内閣の文部大臣になるわけです。この福沢諭吉と森有礼の論争で、もし「教育」が「開発」というふうに訳され、あるいは理解されていたとすれば、日本はもちろんあのような無謀な戦争に突入することもなかったでしょうし、今の世紀末的な混乱もまったく性格を変えていたと思います。

福沢諭吉はリベラルな人でした。たとえば、こういう話があります。咸臨丸でアメリカへ行くわけですが、何のツテもない。そこで正使木村攝津守の召使に雇ってもらって咸臨丸に乗せてもらったんですね。ところが、船というのは非常に階級性の厳しいところです。ですから、咸臨丸は当時の日本の封建的な階級制度と船特有の階級制度の相乗効果があって、非常にきびしい差別があった。そのなかにふたりの10代の若い水夫がいて、そのふたりが食べ物もろくに食べさせてもらえない、過酷な労働を強いられて、一番衛生条件の悪いところに寝泊りしているのをみて憤激し、福沢諭吉は木村攝津守を殴ってしまったというエピソードが残っています。ところがサンフランシスコに着いたときに、ふたりの若い水夫のうちのひとりが死んでしまいます。そこで、福沢諭吉は自分で日本式のお墓を設計して、それが完成するまで一行から離れて、ひとりサンフランシスコに留まったのです。そしてお墓の完成を見て、ワシントン D.C. に一行を追いかけて行ったという話が残っています。それから、5年ほどして、福沢諭吉は2度目にアメリカに行ったときには、帰りに、一行から別れてサンフランシスコに行ってお墓参りをしたという感動的なエピソードが残っています。福沢諭吉はこのエピソードが示すように本当の意味でリベラリズムの立場を貫いたすばらしい思想家であり、教育者でした。

ジョン・デューイが福沢諭吉の考え方をさらに発展させて、1900年、『民主主義と学校教育』、*Democracy and Education* という本を書きます。これが教育の分野でバイブルともいわれ、20世紀を通じて大きな影響力をもつことになります。そして、コロンビア大学自体、当時デューイが中心になって教育学の世界的なメッカになっていくわけです。このなかで、デューイは教育の目的というのを3つの原則に纏めています。学校教育にかんするデューイの3大原則とよばれています。第1は、学校教育の目的は社会的統合にあるという考え方です。これは、それまではせまい家庭とか、宗教的グループとか、地域とか、そういうせまいところで育っていた子供たちが、学校という広い場で一緒に遊び、学んで、そして社会的な存在としての意識を高めて、ひとりの社会的人間として成長していくのを助けるのが学校教育の目的であるというのが第1原則です。デューイは遊ぶということに重点をおいたのです。デューイの考え方を代表する言葉に“Learning by Doing”というのがあります。これは教科書で学ぶのではなくて、子供たちは実際に自分でものをつくったり遊んだり、新しいことを絶えず自分で体験しながら学んでゆくという考え方で、これはアメリカの学校では中心的な考え方になっています。第2の原則、これは人格的發展というのでしょうか、“Personal Development”，福沢諭吉の考え方です。つまり、子供たちは生まれたときに、インネイトな能力、性向、ひとりひとりの子供たちによってすべて違うすばらしい蕾をもっている。子供によって全部違う。適当に刺激を与えて、やさしく育てて、大きな立派な花に育てるのが教育の目的であるという考え方です。デューイは学校教育の一番むずかしいところは、非常に多様な能力、性向をもった子供たちを同じ教室という場で一緒に育てていくところにある、個性を大事にしながら同時にお互いに接触し、遊びながら学ぶということをデューイは強調するわけです。第3の原則は平等主義です。こ

+

+

れはどんな僻地に生まれても、どんな貧しい家庭に生まれても、子供たちはすべてそのときどきの社会が提供できるベストの学校教育を受けることができるようにすべきである。これは社会の責任であるということ強調しています。事実、アメリカの20世紀、それまでも流れはあったのですが、小中学校に関しては公立学校の制度が中心となります。その公立学校がそれぞれの小さな地域で、地域の総意をあげてよい教育を受けられるようにしていこうというので、地域社会が中心になってそれぞれの地域に合った学校をつくっていこうということでした。したがって、教育委員会というのが中心になるわけです。

「教育基本法」という1947年にできた法律の最初の3つの条項をご覧になると、今申し上げたデューイの3大原則がちょっと法律的な固い言葉で表現されています。じつは教育基本法はデューイの影響を非常に受けてできた法律です。時間が超過しそうで恐縮ですが、私は旧制の第一高等学校、今の東京大学の駒場キャンパスで学びました。昭和20年の4月、敗戦の年ですが、一高に入りました。私が入る前にたいへんな事件が起きました。当時、旧制高校は大体同じような制度だったのですが、全寮制で寮の運営はすべて生徒の自治会、全寮委員会が食事から何から何までやっていました。もちろんお金は学校から出るわけですが、その全寮委員会はかなり厳しいルールがあって、そのルールを破って全寮委員会から退寮処分を受けると自動的に退学という非常にきびしい制度でした。この学生自治の制度は大正時代にできた制度なのですが、軍が非常に嫌って、文部省に対して一高の廃校を命令するわけです。そこで、校長先生——安倍能成という哲学者でしたが——が中心になられて教授たちが各寮に寝泊りして、教授たちが実際に管理しているという名目をつくって、かろうじて廃校を免れるということになったわけです。ところが、戦争が終わってすぐのことです。占領軍の将校団が一高に接収のためにやってきたのです。と

いうのは当時一高の本館は師団司令部が使っていて、おそらく占領軍は軍の施設として接收するものとしていたのだと思いますが、安倍能成先生がいられて、こういうことを言われたのです。ここはリベラルアーツの学校である。リベラルアーツの学校は専門を問わず、人類がこれまで蓄積してきた学問的、技術的、文化的、その遺産を10代の終わりにできるだけ広く吸収し、人間的な完成度を高めて、社会へ出て働く基礎をつくるのだと。そういう大事なところは占領というような俗悪な目的に使うところではないと、“Vulgar”という言葉が使われたと思いますが、そういう聖なる、“Sacred”な場所であるということを強調されたのです。占領軍の将校たちがすごすごと帰っていった、当時としてはまったく異例な事件がありました。

昭和20年10月7日、マッカーサー司令部が当時の東久邇宮首班の政府に対して、政治、経済、社会、文化、教育、すべての分野にわたって徹底的な改革をするよう指示、命令します。それを受けて、東久邇宮内閣は即日総辞職をして、幣原喜重郎を首班として内閣がつくられます。安倍能成先生はこの内閣の文部大臣になられ、一高校長を辞められたのです。占領軍は学校教育制度に非常に重点をおいて、そこで教育使節団というのを日本に送ってきました。アドバイスというより命令を与えるということになったわけです。その教育使節団を迎えて、安倍先生が文部大臣として挨拶をされました。安倍先生は英語の非常に上手なお方で、そのなかで先生はこういうことを言われたのです。日本軍が占領中に犯した最も重い罪は、占領した国々の歴史とか文化とか社会的な条件を無視して日本の学校教育制度を押しつけたことだと。あなたたちは占領者として新しい学校教育をつくるというときに、日本軍が犯した同じ罪をけっして犯さないで欲しいということと言われたのです。それを聞いて、団長が感動のあまり壇上に上がって安倍先生に握手を求めた。そして、全員が割れるような拍手を贈ったとい

うことがありました。これはなぜかといいますと、使節団のほとんどがデューイのお弟子さん、あるいはデューイの影響を非常に受けた人たちだったのです。占領の初期は非常にリベラルな時期がありました。それをまさに代表するのが、安倍先生が中心になってつくられた教育基本法です。それはさきほど話したデューイの考えを非常に色濃く反映したものになっています。

ところが実際に教育制度をつくって実施するのは文部官僚です。文部官僚は戦前と同じ人たちが残って新しい学校制度をつくったのです。安倍先生のあと一高校長になられたのは、天野貞祐先生です。天野先生も非常に優れた方で、カントの専門家です。占領軍の意向で旧制高校を廃止するということが表に出てきた。そのときに、さきほどの安部先生が強調された、リベラルアーツの教育をする場所というのが忘れられて、占領軍は旧制高校を軍事とか経済の指導者を養成する場と位置づけて旧制高校の廃止を打ちだしたのです。そこで、天野先生がそれに反対して一高の校長を辞められました。講堂に全校生徒を集めて、リベラルアーツを中心とする旧制高校をなくするということは、日本の将来を危うくするものである。自分はそれに抗議して一高の校長を辞め、野に下ってカントに帰るという非常にすばらしい訓示をされたのです。私たちもすごく感動したことがあります。ところがそれから間もなく天野先生は文部大臣になられて、考えてみれば、戦前より抑圧的な学校制度をつくる中心的存在になられたのです。今でも、天野先生に釈然としないものをもたざるを得ません。

新しくできた学校教育制度は50年になりますが、考え方によっては戦前よりももっと抑圧的な中央集権的なものになってきています。一番よい例がたとえば学習指導要領というのがあります。学習指導要領は、もともと教師がひとりひとり教室でカリキュラムをつくるときの参考資料という意味をもっていたのです。それを1958年、文部省が変

えて法的な強制力をもつものとして位置づけてしまったのです。学習指導要領に合っていないと教科書として認めない。今日の学校学級崩壊の原点のひとつであると思います。教育はひとつの例ですが、教育の経済学でやっているように儲かるから学校に行くと、あるいはできるだけ技術とか能力を身につけて給料が多く貰えるように学生を教育するといった考え方はまったく間違っている。やはり、教育というのは、ひとりひとりの子供たちがもっているインネイトな能力をできるだけ発展させて、そして、ちゃんとした一人前の人間として成長するのを助けるための場であるわけです。

同じようなことは医療についても言えます。そういういろいろな面で社会的共通資本として位置づけたときに、これまでとまったく違った形で考えていくと、当然大きな赤字が発生するのが一般的です。もともと政府の経済機能というのはさまざまな社会共通資本をうまくコーディネートして、決して実際の運営に介入しないでコーディネートして、その財政的なバランスをとるようにするというのが、つまり赤字のところは一般会計から補填するというのが、政府の役割です。税金は、考え方によると、社会的共通資本がうまく揃っていて安心して快適な生活ができることになり、それに対する使用料という意味づけがあるわけです。そういうふうに考えてきますと、社会的共通資本のネットワークをどのようにつくっていくのかというのが、21世紀の課題であるといってもよいと思います。地球温暖化のことについてもお話したかったのですが、時間がなくなってしまい、中途半端ですがこれで私の話を終わりたいと思います。